

## 「戦争を憎む気持ち」

40 年ほど前の本ですが思いを同じくする文章に出会いました。著者は増田れい子さん、書名「独りの珈琲」鎌倉書房 昭和 56 年（1981 年）の本（エッセイ集）で、その言葉は 206 頁にある「ほおずき提灯」という一文の、終わりから 2 行前にあります。

「戦争を憎む気持ち。それを私の心のまんなかにもし続けたいと思います。小さなほおずき提灯として」。

そしてこの文の前にある一節を伝えなければなりません。

「戦場での非業の死をとげた二百数十万の重い命について、思いをこらさないわけにはいきません。自分で産んだいのちを、とりあげられた母親の悲嘆についても---。二百数十万の母親の涙についても、忘れるわけにはいきません」。

（そして戦闘以外で命を絶たれた、無数の民間人の魂のことも、ともに忘れることはできません）と、私は父の記憶に向き合いながら考えています。



ほおずき提灯とは、彼女の子供の頃のこと、お盆の日は提灯に小さなろうそくを立てて、母の後に従い、近くの墓所に先祖の霊を迎えに行きます。子供の場合は生まれてすぐに死んだ一番下の弟の霊を、墓所でろうそくを灯して迎えます。「提灯の灯のなかに入って、家まで来るのだからね。消さないようにね」と母に促がされますが、その母が住井すゑです。この頃、墓所には、少しずつ新しい墓標がふえていました。

住井すゑの「橋のない川」は 1961 年刊行の第 1 部から、1992 年の第 7 部まで続きますが、学生時代から追うように読みました。当時も今も差別は無くなっていないのですが、差別と向き合いそれをテーマに執筆することは困難だったと思います。しかし 1959 年から執筆を始め、1992 年の 90 歳を迎えた年まで続けました。その後も第 8 部の執筆と向き合いながら、95 歳で亡くなります。壮絶なペンによる戦いですが、それは明日の世界のためという信念の闘いでした。しかしその彼女の戦時の作品の一部には、戦後に厳しい評価もあるのです。

その住井すゑを母に持つ増田れい子さんは、毎日新聞の本社論説委員を務めたジャーナリストで、1984 年に女性初の日本記者クラブ賞を受賞した方です。戦後初めて採用された女性記者のお一人という彼女には、暮らしをテーマにしたエッセイも多く、母 住井すゑについても折に触れて書かれています。

偉大な親を持つということ、同じペンの道を歩むということ、そして同じ女性であるということ、なにかこれからに資するヒントが、彼女の著作から見えてくるような気がするのです。

この「独りの珈琲」の表題ともなるエッセイは 23 頁にあります。いずれ「独り」の生活が訪れることは避けられない宿命ですが、少なくとも戦火の渦中に迎えたくはない。その思いを強くしています。それにしても田宮虎彦氏は幸せでした。吉祥寺にあったあの名店の珈琲を十分に楽しんだのですから。

そういえば日露戦争の渦中に、旅順港の戦場に出征した弟に宛てて、「君死にたまふことなかれ」〈明治 37 年 9 月（1904 年）の「明星」に発表〉と歌ったのは与謝野晶子でした。

ああ、弟よ、君を泣く、  
君死にたまふことなかれ。  
末に生れし君なれば  
親のなさけは勝りしも、  
親は刃をにぎらせて  
人を殺せと教へしや、  
人を殺して死ねよとて  
廿四までを育てしや。  
（後略）

ああ、弟よ、君を泣く、  
君死にたまふことなかれ。  
末に生れし君なれば  
親のなさけは勝りしも、  
親は刃をにぎらせて  
人を殺せと教へしや、  
人を殺して死ねよとて  
廿四までを育てしや。



この詩の副題には「旅順の攻囲軍にある弟宗七を嘆きて」と綴られます。また行末の「や」は否定語の意味で、「そうではないでしょう」と弟に語るのです。

当時の市井の雰囲気の中で、論争が起こり糾弾もされるのですが、こうした時代にあって声を上げた多くが女性でした。政治でも首長の多くを女性が務める現代の西欧社会は、平和の希求に欠かせない段階に至ったのかも知れません。争いを好まないだけでも資格があるのではないか。しかし彼女たちは「守る」ことには、毅然と立ち向かいます。

私の戦争を憎む気持ちは、父の記憶から始まりました。自らが敵の銃撃による貫通銃創を受け、傷病兵として内地に戻るのですが、敵を撃ったこともあったのでしょうか。固く口を閉ざしたままだった父は、全てを抱えて逝きました。その葬儀の中で、父を敬礼で送葬くださったのは、戦地の体験を共有する同郷の出征兵士の方々でした。僅か 22 年前の記憶です。団塊世代の私は「戦争を知らない子供たち」ではなく、色濃く残る戦争の記憶を肌で感じていた世代です。私が生まれた昭和 20 年代とはそんな時代でした。

だからこそウクライナへの侵略を目の当たりにして、一層戦争を憎まずにはいられません。

21 世紀には起こる筈がないと信じていた侵略という狂気が、国々の分断を招き、人々の生死を左右しています。国土と、ひいては人類や動植物を育む自然環境の破壊を繰り返し、その結果として命の拠り所である地球の荒廃を招いています。世界に蔓延する異常気象災害に挑む人知やテクノロジーを、嘲るように戦火が広がっています。

小林 文夫

© 2022.10.20 Cafegoods Co., Ltd.